



今月のことば 令和8年(2026)5月 <No.237>

ここにいるよ

入院している家族や友人を見舞った経験のある方なら、覚えがあるのではないのでしょうか？
元気な頃は「頑張ってね」「早くよくなってね」と自然に声をかけられたけれど、日に日に弱って
いく姿を前にすると、その言葉が喉につかえて出てこなくなる――。

満井秀城和上の著書に、心に残るお話が紹介されていました。

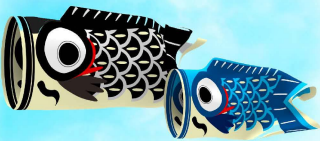


『蓮如上人のことば』満井秀城 著より

ある小さい子どもさんが病気で入院されました。お父さんは毎日、
仕事の帰りに見舞いに寄るのが日課となります。元気そうに見えて
いた頃は、「太郎君、頑張れよ」「早く元気になってお家に帰ろうよ」と声をかけられました。
けれど、日に日にやつれ、見る影もなくなった頃には、もう「頑張れよ」とは言えませんでした。
**「お父さんがここにいるよ」としか言えなかったのです。お医者さんの治療のほどこしようも
なくなったわが子に、お父さんが差し出せたのは、もう「自分自身の名のり」だけでした。**

「頑張れ」と言っている時、私たちはどこかで、相手に何かを「させよう」としているのかもしれ
ません。けれど、本当にどうすることもできなくなった時、最後に残るのは「私はここにいるよ、
そばにいるよ」という名のりだけです。

手も足も出ない、何もしてあげられない…その自分のままで、ただそばにいる。それが人に差し
出せる、最も深い贈りものなのかもしれません。



阿弥陀さまもまた、私たちにずっと名のり続けてくださっています。「南無阿弥陀仏」――それは、私たちが称える言葉である前に、
阿弥陀さまご自身が「我にまかせよ、必ず救う」と告げてくださって
いる、**親の名のり**なのです。

蓮如上人は、『御文章』（三帖第五通）に次のように記しておられます。

**さればこの南無阿弥陀仏の体は、われらを阿弥陀仏のたすけたまへる
支証のために、御名をこの南無阿弥陀仏の六字にあらはしたまへるなり**

＜南無阿弥陀仏とは、阿弥陀さまが私たちを救うという証（あかし）として、
ご自身のお名前を六字であらわしてくださったものなのです。＞

私たちは日々、何かを成し遂げようとし、励まし・奮い立たせ、疲れ果てています。そんな私に、
阿弥陀さまは「もっと頑張れ」とはおっしゃいません。**「ここにいるよ」と**
ただ呼び続けてくださっているのです。南無阿弥陀仏の一声に、「あなたを
決して離さない」という親のまなざしが、すでに込められているのです。



慧日山 真光寺